

第五十三回 妙心寺微笑会総会 令和四年十月三十一日

鎌倉 禅の淵源

円覚寺派管長 花園大学総長 横田南嶺

二十四流

- |      |         |      |      |     |       |
|------|---------|------|------|-----|-------|
| 第一伝  | 一一九一年帰朝 | 明庵栄西 | 千光祖師 | 千光派 | 建仁寺   |
| 第二伝  | 一二二七年帰朝 | 道元禪師 | 承陽大師 | 道元派 | 永平寺   |
| 第三伝  | 一二四一年帰朝 | 円爾弁円 | 聖一國師 | 聖一派 | 東福寺   |
| 第四伝  | 一二五四年帰朝 | 心地覚心 | 法灯国師 | 法灯派 | 興国寺   |
| 第五伝  | 一二四六年来朝 | 蘭溪道隆 | 大覚禪師 | 大覚派 | 建長寺   |
| 第六伝  | 一二六〇年来朝 | 兀庵普寧 | 宗覚禪師 | 兀庵派 | 建長寺二世 |
| 第七伝  | 一二六九年来朝 | 大休正念 | 仏源禪師 | 大休派 | 円覚寺二世 |
| 第八伝  | 一二六五年帰朝 | 無象静照 | 法海禪師 | 法海派 |       |
| 第九伝  | 一二七九年来朝 | 無学祖元 | 仏光国師 | 仏光派 | 円覚寺   |
| 第十伝  | 一二九九年来朝 | 一山一寧 | 一山国師 | 一山派 |       |
| 第十一伝 | 一二六七年帰朝 | 南浦紹明 | 大応国師 | 大応派 |       |

第一伝 栄西禪師 一一四一年～一二一五年

二度の入宋

- |       |     |            |            |                |
|-------|-----|------------|------------|----------------|
| 一一六八年 | 二八歳 | 入宋         | 四月に到り九月に帰る |                |
| 一一八七年 | 四七歳 | 二度目の入宋     | 入竺を断念      | 天台山万年寺 虚庵に参じる。 |
| 一一九一年 | 五一歳 | 虚庵に嗣法して帰朝。 |            |                |

密禅併修 鎌倉での法要の導師 密教僧として勤める

「大いなる哉、心(しん)や天の高きは極むべからず、しかも心は天の上に出づ。地の厚きは測る可からず、しかも心は地の下に出づ。日月の光はこゆべからず、しかも心は日月光明の表に出づ。」(『興禅護国論 序文』)

「栄西はこの宗の絶えるのを嘆き、かつ後五百歳の誠説によって廃を興し、絶を継がんと欲するなり。」(『興禅護国論』第三)

第二伝 道元禪師 一二〇〇年～一二五三年

宝治元年一二四七年、執権北条時頼の招請により鎌倉に入る。

第三伝 聖一円爾弁円 一二〇二年～一二八〇年

入宋 無準師範禪師に嗣法して東福寺開山

建長六年（一二五四）から七年（一二五五）鎌倉に行き、時頼に禅戒を授く

一二五七年にも鎌倉に赴き時頼に『大明録』講義

第四伝 心地覚心 一二〇七年～一二九八年

一二四九年入宋 無門慧開禪師に嗣法して興国寺開山

第五伝 蘭溪道隆 渡来僧 一二一三年～一二七八年

「今より後沐浴の日も、昏鐘鳴より二更の三点に至り、四更に転じ、曉鐘の時に至るまで並びに坐禅を要す。堂に皈せず、寮に趣く者は、罰して院を出さん。」

「無限の清風、来たりて未だ已まず。」「坐禅は乃ち大安樂の法門なり。」

第六伝 兀庵普寧 渡来僧 一一九七年～一二七六年 西蜀の生まれ

一二六〇年 来朝 時頼の招きで建長寺入寺

時頼に印可

我無仏法一字説 子亦無心無所得 無説無得無心中 釈迦親見燃灯仏

時頼 遺偈 業鏡高懸 三十七年 一槌打破 大道坦然

一二六三年 時頼死去 一二六五年 帰国

第七伝 大休正念 渡来僧 一二一五年～一二八九年

一二六九年来朝 開浄智寺 住禅興寺 寿福寺 建長寺

一二八八年 住円覚寺 一二八九年 示寂

佛源禅師（一二一五～一二八九）が時宗に与えた法語

「所謂一念生ぜずして前後を際断し、方に生を出て死に入るも遊戯の場に同じくするが如くなるべし。よしんば卷舒を奪わるるとも常に自ら泰然安靜にして、胸中に寸糸を掛けず、然も立処に真を既し、用処に力を得し、凡そ百万の士の領す

る一夫を駆けるが如くにして、巨敵を払い、社稷を安んじて万世不拔の基を立つ、是れ皆仏性を悟るの靈験なり。」

第八伝 無象静照 一二三四年～一三〇六年

鎌倉の人 一二五二年十九歳で入宋 一二六五年帰朝 一二九九年住浄智寺

第九伝 無学祖元 渡来僧 一二二六年～一二八六年 明州慶元府の生まれ

十三歳父死去 杭州浄慈寺出家 十四歳径山へ 十七歳から無字の工夫五年

二八歳大慈寺の物初大観に参ず。四四歳台州真如寺の住持。五一歳元兵、刃を頸に加えんとす、臨劍の頌を述ぶ。

「乾坤、孤筇を卓つるに地無し、喜得す人空法亦空なるを。

珍重す大元三尺の劍、電光影裏、春風を斬る」

一二七九年来朝 住建長寺 一二八二年開円覚寺

「莫煩惱」『元亨釈書』卷八。弘安四年（1281）の春正月、平帥（北条時宗）来たり謁す。元、筆を采（と）り書して帥に呈して曰く、「莫煩惱」。帥曰く「莫煩惱とは何事ぞ」元曰く、春夏の間、博多擾騒せん。而れども、一風纔に起こつて万艦掃蕩せん。願わくは公、慮りを為さざれ」。果たして海虜百万鎮西に寇す。風浪俄に來たつて一時に破没す。

第十伝 一山一寧 一二四七年～一三一七年 世寿七十一

一二九九年来朝 住建長寺、円覚寺 住浄智寺 住南禅寺

第十一伝 南浦紹明 大応国師 一二三五年～一三〇八年

住建長寺蘭溪に師事

一二五九年入宋 住参虚堂智愚

一二六七年 住帰国筑前興徳寺 住太宰府崇福寺

一三〇五年 上洛 住万寿寺

一三〇七年 住北条貞時の招きにより鎌倉 住建長寺に住す

大應国師―大燈国師―關山慧玄無相大師 住大徳寺、妙心寺へ

怨親平等について

『広辞苑』敵・味方の差別なく、平等に慈悲の心で接すること。

岩波書店『仏教辞典』「戦場などで死んだ敵味方の死者の霊を供養し、恩讐（おんしゅう）を越えて平等に極楽往生させること。」

「さらに文永・弘安の役の蒙古軍撃退のちに敵味方の霊を弔ったことは、民族や国の対立を超えることを意味し、島原の乱のあとで敵（切支丹（きりしたん））味方の霊を弔ったのは、宗教の相違をも超えることをめざしていたわけである。」

『佛光録』巻四

此軍及び他軍、戦死と溺水と、萬衆無歸の魂、唯願わくは速かに救拔して、皆苦海を超ゆることを得、法界了に差無く、怨親悉く平等ならんことを。

『華嚴経』妻子集會、當願眾生 怨親平等、永離貪著

『仏所行讚』故我求常樂、無滅亦無生、怨親平等心、不務於財色。

サンスクリット本からの訳

世の本性は消滅ですから、私は解脱を望んで、かの不滅の吉祥な境地を求めています。身内にも他人にも平等の知を持ち、感官の対象を望んだり嫌ったりすることもなくなりしました（Buddhacarita 第5章第18偈）。

「靖国問題と宗教」

『中村元 生誕100年 仏教の教え 人生の知恵』河出書房新社刊行

「生きて、敵味方に分れて戦っているときには対立があるが、死んでしまえば対立を超えるのである。元寇のあとの法要では、わが軍の将士の霊を弔うのみならず、元軍の将士の霊の冥福を祈っている。島原の乱のあとでは、殺された切支丹側の人々の冥福をさえも念じて、怨親平等の法要が行われている。

われわれの祖先は、国と国との対立を超え、異なった宗教の間の相克を超えて、敵味方の冥福を祈ったのである。

この崇高な、和（やわらぎ）をいとしむ日本の伝統的精神が明治維新のころから失われたのではないかと思う。」